

高校生・大学生のプレゼンテーション力評価の方法に関する1考察

皆川雅章^{*1}

Email:minagawa@sgu.ac.jp

*1: 札幌学院大学社会情報学部社会情報学科

1. はじめに

PCカンファレンス北海道において行われている、高校生・大学(院)生のプレゼンテーション力評価の試みについて記す。それらの1つは、大学院生・学部学生の発表を対象としたプレゼンテーション・スキル賞の授与^{注1)}である。分科会においてプレゼンテーションの技術の評価し、表彰している。もう1つは教科「情報」におけるプレゼンテーション教育の成果公表の場を提供する高校生プレゼンである。これは教科「情報」の必修化以降、多くの高校で行われている、PCを用いたプレゼンテーション教育の成果を公表する場を持つことにより、高校生の勉学のさらなる動機付け、情報教育のさらなる充実に向けた高大教員間の連携を目指したものである。本稿では2009年から実施したこれらの取り組みについて紹介し、今後の方向性を探る。

2. プレゼンテーション力の評価

高校生を対象とした高校生プレゼンの実施、大学(院)生を対象としたプレゼンテーションスキル賞の授与を通じて行っている。これらの概要と実施状況について記す。

2. 1 プレゼンテーション・スキル賞

この賞の評価項目は次の通りである。次の項目について5段階評価を行い^{注2)}、合計点で評価を決める。プレゼンテーションの質を問うという観点から、発表時間の超過は減点対象となる。

- (1) 発表の構成・論旨の適切さ
- (2) スライドのわかりやすさ
- (3) スピーチのわかりやすさ
- (4) 討論における態度
- (5) 聴衆の興味を引いた度合

この賞では、研究内容を効果的に伝えることがポイントとなっているため、一定水準の発表内容が伴えば、大学院生に限らず、学部学生にも受賞の機会がある。

2. 2 高校生プレゼン

高校の教科「情報」で学んだことを発表する場を提供することを目的として開催している。ここでは発表の優劣を競うのではなく、多くの高校生に校外での発表の機会を与えることを目的としている。プレゼンに対して、参加教員などから質問やコメントを受けることができる。これによって、普段とは異なる環境での発表を経験し、その後の勉学の励みになることを期待している。参加者には「参加賞」の賞状を授与している。

3. 実施結果

プレゼンテーション・スキル賞は2010年、2011年に

は、学部学生が1名受賞した。表彰は大会実行委員長が行っている。図1に2010年の学生の発表、図2に大会実行委員長からの表彰、図3に2011年の受賞者の様子を示している。



図1 発表の様子(2010年)



図2 プレゼンテーション・スキル賞表彰式(2010年)



図3 プレゼンテーション・スキル賞受賞者(2011年)

図4に高校生プレゼンの発表後の質疑応答の様子を示す。高校生プレゼンでは、グループでの参加によるプレゼンを認めている。高校での授業における発表と同様の形式で、発表者、スライド操作者などの役割分担が行われている。質疑応答については、登壇者全員に発言の機会を設けている。2009年、2011年はPCカンファレンス会場(札幌)、2010年については、参加者の交

通手段確保の観点から、PCカンファレンスとは異なる時期・会場にて開催した。図5に2010年のCIEC北海道支部長による講評、図6に参加賞授与の様子を示す。2010、2011年の発表テーマは次の通りである。

2010年：

- ①交通事故について
- ②少子化問題について
- ③詐欺
- ④児童虐待
- ⑤Twitterについて
- ⑥依存症について

2011年：

- ① 青少年健全育成条例について
- ② 麻薬について
- ③ ニートについて
- ④ ゴミについて
- ⑤ 日本語について
- ⑥ 犯罪について
- ⑦ 仁木町郷土資料館リニューアル作戦
(⑦はムービーによる参加)

2010年の講評の概要は次の通りである。

- (1) ツールに依存しないプレゼンを行えるレベルに達していることを評価したい。
- (2) プレゼンで使用した資料については出典を示すことが必要である。著作権の問題があることを意識してほしい。
- (3) テーマ設定が大きすぎるように思う。大人達が言っていることを自分達なりに消化し、自分達の視点で意見をまとめる必要がある。
- (4) プレゼンの中身に沿ったテーマ設定をすべき。

続いて、2011年の講評では、次のような指摘が行われた。

- (1) アニメーションを使う意味と必然性を考えるべきである。
- (2) 使用する言葉に関して理解を深める必要がある。
- (3) プレゼンに重みや幅を感じさせるには、情報以外の科目の学習が大切であることを認識してほしい。

このように、高校の指導教員とは異なる第三者から率直な意見を聞き、自ら考えて質問に答えることにより、高校生達が自分達のプレゼンを客観的に振り返る機会となることを期待している。



図4 質疑応答の様子(2010年)



図5 高校生プレゼン講評(2010年)



図6 高校生プレゼン参加賞授与(2010年)

4. 評価方法に関する考察

プレゼンテーション・スキル賞は、学部学生の受賞の可能性を広げるものであり、日常の勉学の励みにつながるかと考えている。現在の評価項目に基づく評価の実施は3年目を迎え、一定水準のプレゼンテーション力を持つ受賞者を決定することが出来ていると考えている。学部の学生であっても、これらの評価項目を意識して訓練することによって、プレゼンテーションの質を向上させることが出来ることが確認された。

高校生プレゼンについては、高校生達が、高校段階でのこのような経験を、大学あるいは社会で活かすことにつながることを期待している。高校教員からの意見を参考に、現段階では順位付けではなく、講評を行うことを通じて高校生のプレゼン力の向上を期待している。教科「情報」の必修化以降、コンピュータを使ったプレゼンテーションが広く行われるようになっており、このような取組みを通じて高大間で連携し、ツールの機能に依存しないことも含めた、プレゼンテーション教育を行える可能性があると考えている。

5. おわりに

PCカンファレンス北海道における高校生、大学(院)生のプレゼンテーション力を評価する試みについて記した。3年間の取組みを通じて一定の成果が得られたと思われるが、今後、評価の質も含めて、生徒・学生(院生)の成長を促すための、より有効な実施方法を模索していきたい。

注1) この賞はPCカンファレンス開催年ごとに授賞のあり方が検討されている。

注2) この評価方法は精密工学会北海道支部の表彰方法を参考にしている。